

2009年12月10日

株式会社マッキンリー  
インテグラン株式会社 御中

## 実験報告書



ITEA 株式会社 東京環境アレルギー研究所  
〒113-0034 東京都文京区湯島 2・2・4 スワンビル  
電話 03-5840-8983 Fax 03-5840-8984



1. 実験名	アレルゲンに対する試料の反応実験
2. 実験の目的	試料にアレルゲン溶液を添加しアレルゲンと反応させ、反応後の溶液中アレルゲン濃度を測定し、アレルゲンに対する低減効果を検討する。
3. 対象と方法	
試料	CELA (セラ)
対照	精製水
実験サンプル数	n=1
対象アレルゲン	スギ花粉アレルゲン(Cry j 1) ダニアレルゲン(Der f 1)
アレルゲン溶液	スギ花粉粗抽出液 (ITEA) コナヒヨウヒダニ粗抽出液 (ITEA)
実験濃度	ねらい濃度: Cry j 1/ 100 n g/ml ねらい濃度: Der f 1/ 100 n g/ml
反応温度、時間	室温、1分、5分、10分
測定サンプル	試料と反応させたアレルゲン溶液
アレルゲン測定法	アレルゲン濃度は、酵素免疫測定法（サンドイッチ ELISA 法） (酵素免疫測定法／96 穴マイクロプレートの各ウェルに1次抗体を固相しアレルゲンを捕捉させた。次に予め標識化した2次抗体を反応させ、酵素、基質を順に反応させた。発色した各ウェルの吸光度を測定し、標準曲線から検体の抗原量を求めた。)
評価方法	試料または対照を反応させたアレルゲン溶液のアレルゲン濃度を測定し、下記の式にて低減率を求めた。 $\text{低減率(%)} = (B - A) / B \times 100$ A : 試料反応後のアレルゲン溶液中のアレルゲン濃度 B : 対照反応後のアレルゲン溶液中のアレルゲン濃度

#### 4.プロトコール

試料、対照とアレルゲン溶液の反応

- ① 試料、及び対照にアレルゲン溶液をそれぞれ所定濃度になるように添加した。ボルテックスで軽く攪拌後、室温で所定時間振とうし反応させた。

アレルゲン濃度の測定

- ② 試料と反応させた溶液のアレルゲン濃度をサンドイッチ ELISA 法で測定した。
- ③ サンドイッチ ELISA 法は、下記の手順で行った。

アレルゲンに対する抗体をマイクロプレートの各ウェルに固相化

↓

ポストコーティング

↓

洗浄後、サンプル、及び標準アレルゲンを添加

↓

洗浄後、標識化抗アレルゲン抗体を添加

↓

洗浄後、酵素試薬を添加

↓

洗浄後、基質を添加

↓

反応停止後、測定

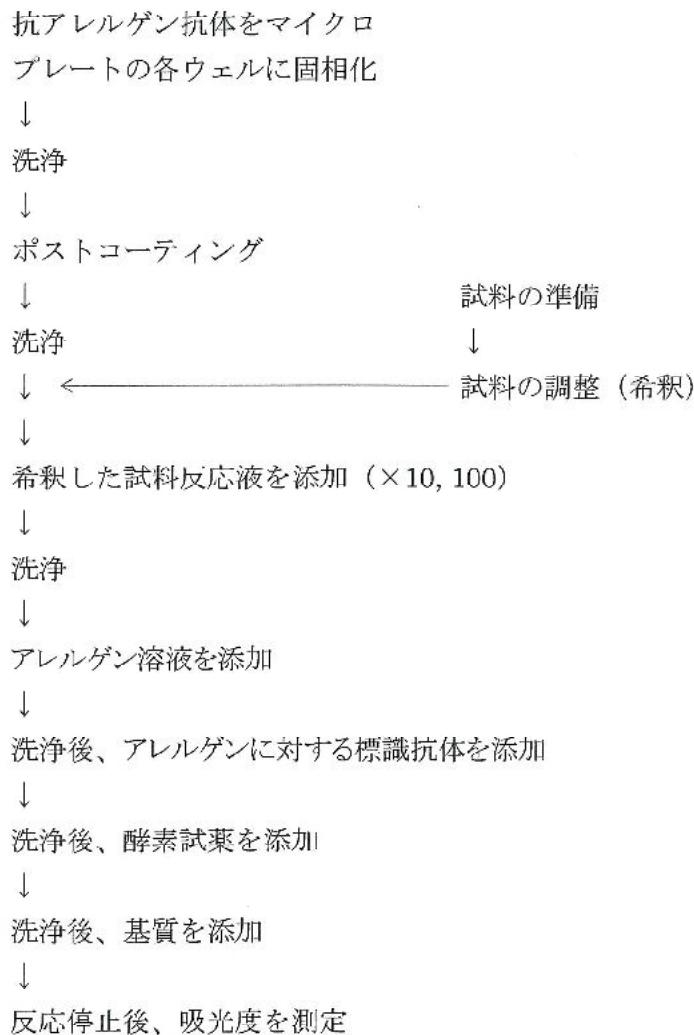
- ④ 標準アレルゲンを用いて作製したウェルの吸光度から検量線を作成し、各試料のアレルゲン濃度を求めた。
- ⑤ 得られた値から、アレルゲン溶液中のアレルゲン濃度減少率を求めた。

### 1次抗体への影響確認実験

⑥ 各試料液が、測定系（1次抗体）へ与える影響について下記実験を行い、測定時の希釈条件と、反応後の解析の参考にした。

⑦ 反応サンプルの作製は、反応液がアレルゲンを含まないこと以外は本実験と同様に行った。

⑧ 実験は下記の手順で行った。



⑨ 各試料の希釈の違いによる影響をウェルの吸光度を測定し検討した。

## 5. 結果

## 1) スギ花粉アレルゲン (Cry j 1)

表 1 1 次抗体への影響確認試験 (OD 値: 450-620nm)

希釈倍率	10 倍	100 倍	備考
試料	1.221	1.434	
対照	1.038	1.038	
試料-対照	0.183	0.396	

- ・希釈倍率は、反応溶液を測定ウェルに添加する際の希釈倍率
- ・影響が小さい場合は値が「0」に近く、抗体へのダメージが強い試料では「試料-対照」の値が負となり、希釈倍率が低い測定において絶対値が大きく現れる傾向があります。

表 2 スギ花粉アレルゲン(Cry j 1)の測定 (ng/ml)

反応時間	CELA (セラ)	対照 (精製水)	低減率
1 分	0.68	129.08	99.5%
5 分	<0.5	125.35	>99.6%
10 分	<0.5	124.42	>99.6%

検出限界 : 0.5ng/ml

## 2) ダニアレルゲン (Der f 1)

表 3 1 次抗体への影響確認試験 (OD 値: 450-620nm)

希釈倍率	10 倍	100 倍	備考
試料	1.067	1.060	
対照	0.954	0.954	
試料-対照	0.113	0.106	

- ・希釈倍率は、反応溶液を測定ウェルに添加する際の希釈倍率
- ・影響が小さい場合は値が「0」に近く、抗体へのダメージが強い試料では「試料-対照」の値が負となり、希釈倍率が低い測定において絶対値が大きく現れる傾向があります。

表 4 ダニアレルゲン(Der f 1)の測定 (ng/ml)

反応時間	CELA (セラ)	対照 (精製水)	低減率
1 分	0.52	93.29	99.4%
5 分	<0.5	90.35	>99.4%
10 分	<0.5	91.22	>99.5%

検出限界 : 0.5ng/ml

## 6. まとめ

- 1) 試料「CELA (セラ)」に、アレルゲン溶液(スギ花粉粗抽出液、またはダニ粗抽出液)を添加し反応させ、反応後の溶液中アレルゲン濃度(スギ花粉アレルゲン:Cry j 1、ダニアレルゲン:Der f 1)を測定しました。
- 2) 1 次抗体の影響試験では、測定に影響を及ぼす強い作用を認めませんでした(表 1、3)。
- 3) アレルゲンとの反応実験では、この度の実験系においてスギ花粉アレルゲン、およびダニアレルゲンへの強い低減作用を認め、5 分後、10 分後では、アレルゲン濃度は検出感度以下に低下しました(表 2、4)。
- 4) 「CELA (セラ)」は、スギ花粉アレルゲン、およびダニアレルゲンへの低減作用があると考えられます。

以上

ITEA 株式会社  
 東京環境アレルギー研究所  
 東京都文京区湯島 2-2-4 スワンビル  
 電話 03-5840-8983 Fax 03-5840-8984

実験実施：白井 秀治

